信濃教育会学び創造研究会

参加のためのチェックポイント

〈ベースとなる授業観〉

「子ども自らが、心ゆくまで探究する」授業

「自分たちが本当に追究したい研究がそこにあります」

自分の研究をもっと深めたい、学校研究を広く公開して学び合いたいと希望する授業者や学校が共同研究を進めています。「子ども自らが、心ゆくまで探究する」授業をベースにした、独自性が生きる実践研究です。

「子どもたちと共に歩んでいる道筋が分かる研究です」

授業者や学校が、子どもたちとどのように授業づくりをしているのか。その“研究のプロセス”を大切にします。いわゆる学習指導案は、既存のスタイルにとらわれない「私たちと子どものあゆみ」として、それに代えています。

「指導者ではなく一緒に研究していく共同研究者を置きます」

指導を受けるという形ではなく、共同研究者として一緒に研究に携わってもらう形です。各分野で造詣の深い先生方に加わっていただくことで、研究に厚みが生まれます。また、共同研究者の先生方には大会当日にワークショップ(もしくは講演)をしていただきます。

参加される皆さんにとって、自らの子ども観や授業観を見返すきっかけとなり、また学校教育活動の活性化を図る一助となることが期待できます!

次ページからは、全 24 研究の「私たちと子どものあゆみ ver.1」をご覧ください。

信教 HP

学び創造研究会

授業づくり

研究校
長野市立櫻ケ岡中学校

共同研究者
渡辺 貴裕（東京学芸大学教職大学院 准教授）

教育方法学・教師教育学。研究テーマは、演劇的手法を用いた学習、実践の省察のための対話など。「学びの空間研究会」主宰。著書『授業づくりの考え方』、『なってみる学び』（共著）ほか。兵庫県出身

学び手意識の再構築から生み出す自立した学習者の育成

櫻ケ岡中学校では、学校目標「いのち輝く学校」のもと、願う生徒像「問い」や「願い」を大切に繰り返しチャレンジする姿の具現に向け、日々教育活動を行っています。研究テーマは「探究的な力を培う自己決定的学習の推進（２年次）」学びのキーワード「決める・関わる・深める」を合い言葉に授業づくりを推進しています。本年度は、授業研究の名称を「かがや木プロジェクト」とし、学校づくり・組織開発に繋がる柱としての研究推進のあり方を探ってきました。共同研究者に東京学芸大学の渡辺貴裕先生をお迎えし、模擬授業を通して、学び手の感覚になって授業づくりを行うことで、授業観や生徒観を磨き合います。若手の先生もベテランの先生も教科の枠を超えた授業づくりを、目指しています。

櫻ケ岡中学校
10/14（火）／遠山 恒輝（埴生中）
10/17（金）

国語

研究者
遠山 恒輝（埴生中）

共同研究者
大井 和彦（信州大学教育学部 講師）

長野県高校教諭、国立中等教育学校教諭を経て、現職。専門は国語科教育学。言語生活と規範的言語とを繋ぐ言語活動の構築と、自他の感性の涵養を目指した探究的学習を志向している。

１年生の読書教材を使い、「読みの交流」を通して、一人一人の生徒が感じ、考えたことを自由に伝え合い、学び合う国語の授業

中学校１年生の読書単元「あと少し、もう少し」と「西の魔女が死んだ」の２つの教材を使い、同じ中学生が主人公の物語文から、生徒同士が共感したり、互いの考えの違いなどを考えたりする授業を 目指します。

作品の言葉や表現と自分を重ねることや、同じ考えや違う考えをもつクラスメイトと話し合うことを通して、読みの広がりや深まりが起こることを願い、授業研究を進めています。

学び創造研究会

学校づくり

研究校
軽井沢町立軽井沢西部小学校

共同研究者
赤坂 真二（上越教育大学教職大学院 教授）

19 年の小学校勤務を経て 2008 年 4 月より現所属。日本学級経営学会共同代表理事、日本授業ＵＤ学会理事、NPO 法人全国初等教育研究会 JEES 理事

自律をめざし探究・共生する子どもの育成

子どもたちの自律をめざし、子どもと教職員全員で学校づくりをしています。子どもが自分で決め、自分で調整し、自分で振り返り修正する『自己調整学習』、クラスみんなで課題を解決していく『協働』の２つの柱で、授業改善を図ります。『協働』はクラスみんなで課題を解決し、自治的集団づくりを行う『クラス会議』を重点的に研究していきます。当日は、多くの先生方にお越しいただき、様々なご意見をいただきたいです。

軽井沢西部小学校
10/27（月）／佐藤広基・シェリー・ユー（日義中）
10/27（月）

英語

研究者
佐藤 広基 / シェリー・ユー（日義中）

共同研究者
直山 木綿子（関西外国語大学英語キャリア学部 教授）

京都市立中学校英語科教諭、京都市総合教育センター指導室指導主事・京都市教育委員会学校指導課指導主事、文部科学省教育課程課教科調査官・国立教育研究所教育課程研究センター教育課程調査官、文部科学省初等中等教育局視学官を経て、現職

スピーチ（発表）活動を通して、生徒の主体的な学びを引き出す英語授業の在り方

一昨年度から継続して、直山木綿子先生のご指導のもと、「話すこと」に重点を置いた授業づくりに取り組んできました。本年度は、直山先生を共同研究者としてお迎えし、これまでの３年間の集大成として、より深い実践に取り組んでいます。

本校は今年度末をもって閉校し、小中併設校として歩んできた長い歴史に幕を下ろします。閉校をきっかけに、生徒たちは改めて「自分たちが育った日義の魅力」に気づきました。木曽を訪れる外国人観光客の多くが日義を通過してしまう現状を知り、「日義のよさを伝え、立ち寄ってもらいたい」という思いが生まれました。また、実際に観光客と英語で交流する中で、その思いや相手の困りごとにも触れ、「日義に行ってみたい」と感じてもらえるように、自分たちの思いを込めた「自分の言葉」でふるさとの魅力を伝える授業を展開していきます。

理科

研究者
金田 弦樹（真田中）

共同研究者
植原 俊晴（信州大学教育学部 助教）

県外で 20 年ほど学校教育に携わっていた。研究分野は理科教育学と教授学習心理学で、知識の操作による探究活動の可能性や深い学びの実現、概念の変容など。座右の銘は「不易流行」

中学校理科の授業での「グループ形態による自由進度学習」の取組

私が取り組む実践は、中学理科でのグループ形態による自由進度学習です。自由進度学習というと、個別形態が主たるものかと思います。今まで中学理科での個別自由進度学習による授業を参観してきました。その中で、個別型による学習形態によって、個々の生徒が自らの学習を調整し、主体的な学びにつながるという長所がある一方で、観察・実験の精度のあいまいさや対話的な場面が少なくなるという課題も感じていました。そこで、本研究では、中学２年生「電流とその利用」の単元で、グループ形態による自由進度学習を取り入れて、生徒が対話を重ねることで協働的な学習を広げ、観察・実験の精度を高め、学びを調節しながら追究を進める授業を目指します。

学び創造研究会

金田 弦樹（真田中）10/28（火）／ 月岡 純平（竜東中）10/29（水）

総合的な学習の時間

研究者
月岡 純平（竜東中）

共同研究者
齋藤 博伸
（国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官）

生活科、総合的な学習の時間、総合的な探究の時間を担当

主体的・対話的で深い学びを実現する質の高い探究

本校では、これまでの総合的な学習の時間は、地域とのつながりはあるものの、単発的な活動になってしまっているという反省から、２年前に「３年間通して行うふるさと学習」に転換し、学年単位での探究を進めてきました。地域の魅力や課題について学習を進めていく中で、地域の現状や地域のために本気になっている大人の思いについて知り、一緒に活動することを通して、子どもたちは「この地域がなくなってほしくない、長く続いてほしい」という願いをもち、「自分たちが地域にできることを考えたい」と課題意識を高めました。その思いを基に、子どもたちが、「地域の現地・現物・現実」を中核として、探究を重ねていく授業を考えていきます。

私たちと子どものあゆみ ver.1

探究的な学び

研究校
松本市立開智小学校

共同研究者
岩瀬 直樹（軽井沢風越学園 校長）

東京学芸大学大学院教育学研究科学校教育コース修士終了（教育学）。埼玉県の公立小学校教諭 22 年間勤め、東京学芸大学大学院教育学研究科 准教授、一般財団法人軽井沢風越学園設立準備財団設立副理事長を経て現職

共に学び合う　子どもと教師　～わくわくする授業をつくる～

今年度で３年目となる生活科・総合的な学習の時間を中心とした「探究的な学び」の研究。各学年、昨年度までの研究を活かし特色のある実践に取り組んでいます。学び創造研究会では、４・５年生が縦割りのグループで進めているテーマプロジェクトの授業を公開します。食・自然・光・布・防災・交流というテーマから興味あるものを選んだ子どもたちが、１学期にアンカーイベント（導入の共通体験）を行いました。２学期からは特に興味を持ったことを深堀りした各自のテーマに向かいプロジェクトの学びを進めていきます。また「探究的な学び」を実践する教師の願いや悩み、子どもと共に歩もうと挑戦するエピソードにも光をあてて研究を深めていきます。

学び創造研究会

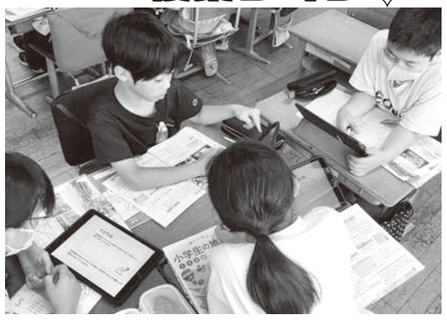
開智小学校 10/31（金）／ 伊那東小学校 11/6（木）

授業づくり

研究校
伊那市立伊那東小学校

共同研究者
佐藤 和紀（信州大学教育学部 准教授）

博士 (情報科学、東北大学)。東京都公立小学校主任教諭等を経て現職。専門分野は教育工学、教育方法学、特に情報教育、初等教育における教育方法。文部科学省初等中等教育局・視学委員など。



深い学びの視点に立った授業改善
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実とともに～

本校では、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善をすすめ、子どもたちの力をバランスよく育むことを目指しています。これまで、本校の先生方は、子どもたち一人一人の自律的な学びを支えられるよう、さまざまな支援のあり方について、悩み、話し合い、実践を重ねてきました。１学期は、クラウドを活用し、子どもが自律的に学べるよう、探究のプロセスに沿った授業を展開したり、子どもに学びを委ねる時間を増やしたりしてきました。単元構想、ルーブリックの作成、学ぶ手順の共有にも挑戦し始めています。自分に合った学び方を選択し、自ら学習を調整する子どもたち。その姿に寄り添い伴走する教師の姿を、ぜひ見に来てください。

学び創造研究会

赤穂小学校「単元内自由進度学習」部会 11/6（木）／ 三本柳小学校 11/6（木）

自由進度

研究者
赤穂小学校「単元内自由進度学習」部会

共同研究者
佐野 亮子（東京学芸大学非常勤講師）

東京学芸大学大学院修了、上智大学大学院博士号（教育学）取得。専門は教育方法で、近年は現場の先生方と単元内自由進度学習の実践づくりを試みながら実践研究を行っている。

単元内自由進度学習　次の一歩　～自立した学習者の育成～

昨年度、本校では初めて「単元内自由進度学習」に取り組みました。その実践から、単元内自由進度学習は、一斉授業ではなかなか実現しづらい「自立した学習者の育成」に大きな効力を発揮し得ることが見えてきています。一方で、その単元でつけたい思考力、判断力、表現力に迫ることが難しいということも見えてきています。今年度はそうした長所短所を踏まえ、本校の単元内自由進度学習を一歩前に前進させたいと思っています。

【本校が考える「次の一歩」】

ⅰつけたい力に迫れるような、学習材、展開、ふりかえりの方法を考える。

→特に「自己調整力」と「思考力・判断力・表現力」の育成にかかわって

ⅱ「本物」を感じ、子どもたちがもっと「自然とやってみたくなる」「ワクワクしてしまう」環境をつくる。

授業づくり

研究校
長野市立三本柳小学校

共同研究者
岡野　昇（三重大学教育学部 教授）

博士（心理学）。学びの共同体スーパーバイザーとして、学校現場の授業研究や校内研修に多数関与し、学校教育における学びを推進している。石川県公立小学校教諭、三重大学准教授等を経て現職

自ら学び続ける力を育むための授業づくりのあり方

三本柳小学校では「自ら学び続ける力を育むための授業づくりのあり方」というテーマのもと、子どもたちの主体的な学びにつながるよう「子どもを変える」という考え方から「子どもの環境を変える」という視点に立った研究に取り組んでいます。

これまで、子どもが安心して考え、表現できる環境（人間関係づくりをベースとする）や、友だちの考えを「知りたい」「聴きたい」と思えるような環境をつくろうと、日々実践を重ねてきました。共同研究者に三重大学の岡野昇教授をお迎えして３年目となります。本校の授業実践を通して、参観者の方々からもアイディアをいただきながら更に研究を進めていきたいと考えています。

私たちと子どものあゆみ ver.1

学び創造研究会

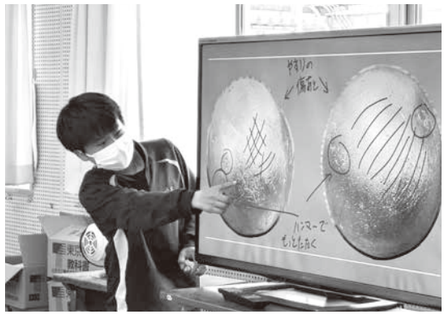
伊那中学校 11/7（金）／ 都筑 彩花（旭ケ丘中） 11/7（金）

子どもの学び

研究校
伊那市立伊那中学校

共同研究者
臼井　学（豊科南中学校 校長）

公立中学校・信州大学教育学部附属長野中学校教諭、文部科学省教科調査官、信州大学教育学部附属長野中学校副校長、県教育委員会事務局学びの改革支援課長などを経て、令和７年度から現職



子どもたちはどう学ぶのか　～ 探究・協働・ＵＤ化～

本校の強みは、幼少期から好奇心や探究心を働かせながら、多くの体験を重ねてきた子ども達です。そういった子ども達の力を最大限に生かすために、教師がすべてを主導せず子どもが自由に選択したり、試行錯誤したりする場面を意図的・計画的に設定し、「子どもたちはどう学ぶのか」に着目する姿勢を私たちは研究の柱として掲げています。

本年度は、「探究活動と教科等における探究的な学習の充実」、「個別最適な学びと協働的な学びの実現」、「教育活動のユニバーサルデザイン化」の３点を研究の軸に据え、子ども主体の学校づくりを推進しています。

複線型授業

研究者
都筑 彩花（旭ケ丘中）

共同研究者
佐藤 大樹
（国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 中学校英語学力調査官〔併任〕教育課程調査官）

長野県内公立中学校教諭、信州大学教育学部附属長野中学校教諭、長野県教育委員会事務局南信教育事務所学校教育課指導主事を経て現職

話すこと［発表］の力を高める複線型授業

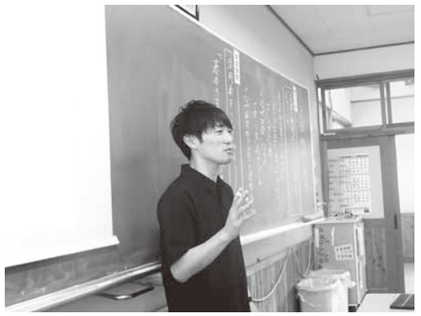
日々の実践の中で、「伝えたい」「知りたい」と思えるコミュニケーションにつながるように、目的や場面、状況を設定して言語活動を行うことの大切さを実感しています。一方で、生徒一人一人のできることや課題が異なる中で、全体で同じことを一斉に行うだけの授業に難しさを感じていました。そこで、生徒の興味・関心を踏まえたコミュニケーションを行う目的や場面、状況などの設定、言語活動に加え、昨年度より生徒一人一人が見通しをもち、必要な学び方を自ら選択して単元の目標に迫る複線型授業に取り組み、少しずつ成果と課題が見えてきました。当日は、話すこと［発表］における実践をご覧いただき、これからの授業の在り方について、先生方と一緒に考えていきたいと思います。

国語

研究者
小林 厚志（屋代高附属中）

共同研究者
西 一夫（信州大学教育学部 教授）

専門は古典文学、古典文学教育。巣鴨学園中学校・高等学校教諭から平成 17 年 10 月に信州大学教育学部講師に着任。平成 23 年 2 月より現職。令和 7 年 4 月より教育学系長



自らの学びを語り合い、新たな価値を創出する授業

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向け、①生徒が自ら語りたくなる題材や場面の設定、②自らの学びを友と語り合う場面の設定、③教師による個と個をつなぐ発問の３つを重点に授業づくりを行っています。本研究では、国語科の古典の授業において、地域に縁のある「姨捨伝説」を取り上げ、生徒が「大和物語」を軸に、「沙石集」、「枕草子」、「続歌林良材集」、そして千曲市内にある石碑の民話と読み比べて、その学びを語り合うことで、題材にある魅力や価値を新たに見出すことを目指します。「個別最適な学び」を「孤立した学び」で終わらせず、「個の学び」の「その先」を切り拓いていきたいと考えています。

学び創造研究会

小林 厚志（屋代高附属中） 11/7（金）／千栄小学校 11/12（水）

少人数・複式

研究校
飯田市立千栄小学校

共同研究者
伏木 久始（信州大学学術研究院教育学系 教授）

専門は教育方法学・教師教育学。カリキュラム研究で博士号取得。心理職を経て小・中・高の教諭時代に教科横断的な学習の実践研究に取り組む。2003 年度より信州大学へ転任し、2012 年より現職

自分に合った学び方で主体的に学べる子ども
～子どもたちに合った学びの場を模索して～

今年度は全校２３名、２・３年生が複式学級の本校。授業の中では一人一人に目が行き届き、きめ細やかな指導ができる良さがあります。一方で、子どもたちが助けを求める前に教師が手助けしてしまったり、子どもたちも分からなければすぐに先生が教えてくれると、受け身になってしまったりすることがあります。また、少人数だからこそ学力差がよく見え、一斉指導の難しさを感じることもありました。そこで、令和４年度から少しずつ取り組んできた自由進度学習を、今年度は全学年でチャレンジし、子どもたち一人一人が学ぶペースや場所、誰と学ぶかなどを選択して、主体的に学ぶ姿を目指します。全学年公開しますので、ぜひ子どもたちが学ぶ姿をご覧ください。

私たちと子どものあゆみ ver.1

子どもと教師

研究校
安曇野市立豊科南小学校

共同研究者
伏木 久始（信州大学学術研究院教育学系 教授）

専門は教育方法学・教師教育学。カリキュラム研究で博士号取得。心理職を経て小・中・高の教諭時代に教科横断的な学習の実践研究に取り組む。2003 年度より信州大学へ転任し、2012 年より現職

豊科南小の学校改革のキーワード　子どもたちに『ゆだねる』

協働的な学び…のその前に「子どもたちは自分の思いや願いをもって学校生活を送っているのだろうか？」を問い返してみた私たち。ここから今年度の挑戦が始まりました。キーワードは子どもたちに『ゆだねる』。授業と学校生活の両面から学校改革に取り組んでいます。子どもたちに『ゆだねる』のは「勇気」と「ずく」がいるけれど、様々な場面で「先ずはやってみよう」の挑戦を積み重ねています。見通し、推進力となりうる気持ち、環境整備など、『ゆだねる』ために必要なことも見えてきました。『ゆだねる』ことは、主体的に学び行動する子どもの姿につながっていくのか、これからも続く挑戦を一緒に考え合いたいと思います。

学び創造研究会

豊科南小学校 11/14（金）／松代中学校 11/14（金）

教師の学び

研究校
長野市立松代中学校

共同研究者
岩川 直樹（埼玉大学教育学部 教授）

教育の臨床的な研究をしてきている。教育現場で出会った子どもや教師の姿、教室の出来事や教師の語りにふれながら、そこに起きていることの意味のゆたかさを分かち合うことば（概念）を探ろうとする探究。あらゆる問題を個人の内側に閉じこめる言説が広がる社会のなかで、人と人とのふれあいと分かち合いに教育の根源的な意味があることに立ち返るような時間を共有したいと考えている。

子どもの今を感じとる先生に向けて

昨年度「子どもの今を感じとる先生プロジェクト」として、生徒とのかかわりについて先生同士で思いを出し合う場をもちました。つい先回りしてしまう指導や、生徒を枠にあてはめてしまうことへの戸惑い等、互いの悩みを共有することができました。

今年度は、先生たちのそういった声をもとに、「子どもの今」をどう受けとめ、生徒のどんな学びの姿や環境をつくっていくかを先生たちみんなで考えていきます。日々の気づきを伝え合い、安心して話のできる雰囲気の中で、先生同士のリスペクトを大切にしながら、生徒たちがワクワクする学びの場を目指します。

学び創造研究会

原小学校 11/21（金）／高遠小学校 11/21（金）

豊かな関係性

研究校
原村立原小学校

共同研究者
安積 順子（箕輪町教育委員会 指導主事）

元赤穂南小学校長・キャリア教育コーディネーター。子どもたちが、自分の人生を切り拓く力の構築を願い、生活科・総合的な学習にかかわる授業指導や、小中高校のキャリア教育サポートに携わっている。

誰にとっても「あしたも来たくなる学校」をめざして

本校のめざす学校像は「あしたも来たくなる学校」です。そして、めざす学校像実現のために本年度は研究テーマを「学級での出会いを大切にした、ワクワクする探究の授業」としました。奇跡的に出会った学級の仲間と、やりたいことを自分たちで考えて実行する中で、突き抜ける豊かな関係性を築くことができると考えています。また、原村で大切にしている子ども観は「子どもはやる気と可能性に満ちており、自己更新していく存在である」です。教師が子どもを肯定的に捉えることができるようになることも大切です。子どもも教師もワクワクしながら共に成長する学校となるよう探究している姿を公開します。

道徳

研究校
伊那市立高遠小学校

共同研究者
山浦　貞一（信州大学教職大学院 特任教授）

道徳教育・学級経営・キャリア教育を主に実践的な研究を積み重ねてきた。現在は、下伊那全郡研究の全体講師として、学び続ける個の育成をテーマに実践と知見を深める教科等研究を伴走する共同研究に従事している。

対話を通して、見方・考え方を広げる道徳教育の実践

子どもが“自分ごと”として問いに向き合い、友・材・自分・教師などとの対話を繰り返して価値観や考え方を広げ、「納得できる答え」を求め続けていくことができる授業を目指しています。そのような学びを支える一つの手立てとして、振り返りの蓄積を大事にしています。思いを言語化する中で自己や友の気持ちの変容や成長に気付き、学びを自分ごととして捉える力が育っています。振り返りへの教師のフィードバックによって、児童の学びへの意欲を高め、授業の見直しや次の支援の工夫にもつなげていきたいです。

また、教師自身も子どもと共に学び続けるために、本時の問いや価値について見つめ直していくことが必要であると考えています。地域に根ざした地域教材（郷土資料）・自作資料など多様な教材を教科書と併せて活用しながら研究を進めています。

私たちと子どものあゆみ ver.1

学び創造研究会

女鳥羽中学校 11/21（金）／佐久市・東中学校 11/28（金）

キャリア学習

研究校
松本市立女鳥羽中学校

共同研究者
中村 麻由子（大東文化大学文学部 准教授）

博士（教育学）。専門は教育臨床学。人とかかわる専門職でありながら学校教育という制度の内側で仕事をする教師たちが織りなす教育実践の理論的・実践的な意味や価値を探求している。

誰もが WIN・WIN になる地域共創のキャリア学習

本校のキャリア学習は、「私」の暮らしを取り巻く様々な人や出来事に、「私」がかかわっていき、共に何かを創り出していくことで、「私の暮らし」をより豊かにしていく実感や経験を積むことです。中学校を卒業しても「子ども食堂」に顔を出したり、ホテルに造成した「ビオトープ」の管理を手伝ったり、よく行っていた「福祉施設」に遊びに行ったり、「おからハンバーグ」を家で調理したり・・・・そして、それらが地域に根付き継承されていく営み、文化になっていくことが目標です。このような中学校でのキャリア学習の経験と記憶は、生徒が将来どの地にいても、どのような職に就いていてもきっと生かされる経験知となることでしょう。

縦割り総合

研究校
佐久市立東中学校

共同研究者
北澤 嘉孝（信州大学教職大学院 特任教授）

子どもたちが「多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手」に育っていくために、学校・教師が果たす役割は何かを学校経営の視点から問い直す。

「自分たちは何ができるか」を問い続ける縦割り探究

自分たちが育ったこの地域のために「自分たちは何ができるか」を“問い”として、14 の縦割りグループが地域と向き合いながら探究を進めています。地域の魅力や課題に気づき、それを仲間と共有しながら、調査や聞き取り、発表に向けた準備を進めています。今年度は活動の過程での対話や振り返りを重視し、問いの変化や探究の意味を言葉にしていく力の育成を意識しています。教員はグループの一員として、生徒の言葉に耳を傾け、ときに問いかけを返しながら、気づきや発見の連鎖を後押ししています。かかわった地域の方も、学びを共にする姿勢で生徒に期待を寄せています。

授業づくり

研究校
池田町立池田小学校

共同研究者
村瀬 公胤（一般社団法人麻布教育ラボ 所長）

学校教育コンサルタント、公認心理師。全国の学校で授業研究の指導助言者を務めるとともに、海外で JICA プロジェクト等に参加し、多様性と対話に基づく国内外の教育改革を支援している。

一人も取りこぼさない魅力ある授業づくり
～多様な学びが生まれる問いづくり～

本校では昨年度、「インクルーシブ教育」を視点に、個別に支援が必要な児童に対する配慮や支援について理解を深めながら、全ての子どもたちにとって学びやすい授業の UD 化について研究を進めてきました。本年度は、協働的な学びをさらに深めていけば全ての児童が自分らしく参加できる学びになっていくのではないかと考え、「問い」に着目し、研究を進めています。児童の興味関心、願いに沿った問いや、すぐには解けない少し難しい問いなど、「授業のねらい」の達成を目指した問いづくりを心掛けています。また、麻布教育研究所の村瀬公胤先生ご指導のもと「選び、考え、表現する」授業を目指し、選ぶことから始まる問いの設定にも取り組んでいます。

学び創造研究会

池田小学校 11/28（金）／小林 大真（栗ガ丘小）11/28（金）

自立した学び

研究者
小林 大真（栗ガ丘小）

共同研究者
佐藤 和紀（信州大学教育学部 准教授）

博士 (情報科学、東北大学)。東京都公立小学校主任教諭等を経て現職。専門分野は教育工学、教育方法学、特に情報教育、初等教育における教育方法。文部科学省初等中等教育局・視学委員など。

自立した学び　～子ども自ら学ぶための教師の支援とは～

不安定な社会を生きる子どもたちが自信を持って未来へ踏み出すためには、自ら学び考え続ける力が必要不可欠です。従来の ICT 導入や探究活動における課題を踏まえ、今後は「自立した学習者の育成」を目指して、個別最適化された学びと協働的な学びを両立させることが重要です。

系統性を意識した単元構成や導入の工夫、単元を超えた自由進度学習を通じて、子どもたちが主体的に考え、学び続けられる力を育み、「思考を深める問いかけ」と「励まし・肯定・確認」の発話など、教師の支援を通して子どもの意欲を促し、子ども同士の対話を生み出すことで学びを深めることができると考えています。

私たちと子どものあゆみ ver.1

学校づくり

研究者
三輪小学校研究推進部

共同研究者
宮野　尚（信州大学教育学部 助教）

学校改革における教師の職能成長について歴史的に研究している。特に近年は、教師が教師を教える行為の中で、どのような学びを展開しているのかについて関心を抱いている。

ともに学び合う　学校づくり
ー 同僚との語り合いの場「みわカフェ」を通して ー

「ともに学び合う学校づくり」に向け、教師が自律的に学ぶことができる校内研究の在り方を探るために２つの実践を試みています。

【同僚との語り合いの場「みわカフェ」の継続】
「何のために」「本当に必要か」「大切にしていることは」と、教育課程や授業づくりにおけるその時々の旬のテーマについて同僚と語り合い、自らの教育観や互いの強みや持ち味を交流しています。

【パートナーシップ型の校内研究体制】
「教師も自らの学びの運転手」を合言葉に、３人程度のチームを編成し、研究内容や方法、研究の進度なども各チームに委ねられています。教師も自らの研究課題に向け、選択や調整をしながら自分ごととしての研究を同僚と進めています。

学び創造研究会公開当日も「みわカフェ」を開催します。ぜひ、ご参加ください。

学び創造研究会

三輪小学校研究推進部 11/28（金）／臼井 拓哉（四賀小・松本市）11/28（金）

体 育

研究者
臼井 拓哉（四賀小・松本市）

共同研究者
藤田 育郎（信州大学教育学部 准教授）

専門は体育科教育学。主な著書（共著）に「体育科教育学入門」「初等体育授業づくり入門」など。

子どもたちが『夢中で』運動に親しむことのできる環境づくり
～「楽しい！」「またやりたい！」と思える運動遊びとの出合い～

私は、「夢中で体を動かしたくなる環境づくり」に着目した研究を進めています。というのも、本校に限らず現代の子どもたちは、体を動かす機会が減り、運動への意欲にも差が広がっているという課題を感じているからです。授業だけでなく、日常の中でも自然と体を動かすことのできる場が必要だと考えていたところ、スウェーデンの『ピアノ階段』の取組を知り、「これだ！」と思いました。階段を踏むと音が鳴る仕掛けにより、階段の利用者が 66％増加したという実験結果があり、「楽しいから動きたくなる」環境の力の可能性を感じました。子どもたちが「またやりたい！」と思える運動遊びとの出合いを通じて、体を動かすことへの親しみと意欲を育むため、試行錯誤を重ねています。

ぜひ、一緒に運動遊びを体験してみませんか。